

活力があるというところは共通項がある。それは地域の特性を明確にして、新たな販路を見出したところだ。

今、注目しているひとつに、福岡県岡垣町「グラノ24Kぶどうの樹」がある。玄界灘に面した防風林のすぐ内側にある。

森の中にレストランやジャグジー付きの宿泊施設、チャペル、お花畑などがある素敵な空間。農家60軒と漁師30名と連携して最上の料理ができる。

岡垣町は人口3万2千人。「ぶどうの樹」には年間60万人が訪れる。

グラノ24Kは従業員135名。パート、アルバイト500名。売り上げ30億円。

地域にあるものをすべて動員し、季節と海と森と花と食と風景を一体化させて売っている。地域の環境を生かすことで、都心にはないくつろぎや自然や食を提供し、多くの人を魅了している。

『里山産業論』
「食の戦略」が六次産業を超える



KADOKAWA
新書判 228頁
定価800円+消費税

ここは、海外に出かけて観た町づくりのアイデアが多く取り入れられている。森から環境を作るとするのはドイツのフライブルグから。里山の周辺を散歩するのは、イギリスのフットパスから。海岸の清掃はハワイの観光政策から。

「ぶどうの樹」では、毎年、スタッフを10名ほど、ドイツ・フライブルグとその周辺の農村との交流人材教育もおこなっている。

今、グローバル社会のなかで、海外客が増え、さまざまな情報があふれ、大量生産製品も多く、さまざまなものが手に入る。

そうなると、食を売りだすにも、観光にも、ここしかないものを打ち出したほうが訴求力が高くなる。「ぶどうの樹」のように、地域らしさを食、環境、風景までを徹底させれば、人が集まり、食が売れて、大きな力となる。